

# 漢詩神奈川

第 32 号

神奈川漢詩連盟  
事務局

神奈川県海老名市  
浜田町16-9

TEL-FAX  
046-233-7641

発行人 三村公二  
編集人 高津有二

## 石川忠久先生のご逝去を悼む

神奈川漢詩連盟会長 三村公二

去る七月十二日の早朝、石川先生が急逝された。その十日程前、湯島聖堂でお会いした時は、お元氣にお話しされていたので訃報を聞いた時には非常な驚きであった。残念でない。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

神奈川漢詩連盟はこれまでいろいろな局面で故石川先生には多大の恩恵を受けてきた。連盟創立の第一回総会にご出席いただいたから、毎年の総会には欠かさずご出席いただき、更には、ご講演、吟行会、自詠自書展、叢書発刊等を通じて数々の励ましの言葉や玉

詩を頂いてきた。この会報に先生からいただいた玉詩の幾つかをを選んで年代順に掲載したが、何れも過大なお褒め

の言葉に満ちている。

三村公二会長



初心者入門講座から始まって、洒落た名前を付け、先輩がその指導をする漢詩サークルを作り、更に、鑑賞会、吟行会等と続く神漢連の一連の活動を「金河新様式」と名付けられ、多大の激励・称賛を頂いたが、この言葉ほど神漢連会員を元気づけたものはなく、今も自分たちの活動に自信をもって取り組む原動力になっている。

又、「佩文齋詠物詩選」の輪読会から故城田六郎さんが選び出した七言絶句を「七言絶句ここから一步」として発刊し、それを神漢連叢書と名付けた時には、「多くの人には非座右に具えてもらいたい」とまで絶賛して頂いた事もその後の叢書発刊に繋がっている。発刊した叢書は先生のお言葉通り他県連の方々に広く活用していただいている。神漢連はこれからも先生のご遺志を継いで、漢詩の

普及・拡大の為に、全国の漢詩連盟の先頭を切って鋭意努力を続けていきたい。

所で、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」の motto は、漢詩を作る人にも、鑑賞だけを楽しむという人にも広く定着してきたが、最近、その取り組み姿勢が今までとちよつと違ってきているような気がしてならない。以前は、漢詩を作る人は一様に上手な詩を作って、出来れば漢詩大会で入賞したいという方が多かったが、最近入会してこられる人の中には、漢詩は作るが、漢詩大会などどうでも良い、その代わり、規則を緩やかにしてもっと自由に詩を作りたい、現在の事象に関する詩等も作って気楽に楽しみたいという方が増えてきているように思う。私に川柳好きの友人がいる。彼は、当初、もっぱら時事川柳を指し、朝日新聞の川柳欄の常連になっていたが、本格川柳(文芸川柳)をきちんと学んでから時事川柳に取り組まないと底が浅いと指摘され、抵抗しながらも、最近文芸川柳の何たるかを勉強している。漢詩もこれと同じで、

先ずは基本となる花鳥風月の詩がそれなりに出来るようになってから、時事漢詩等に取り組むべきである。先ずは「型」をきちんと作ってからそれを崩していくという道筋を取らなると、人を感動させる詩は勿論の事、自分なりに満足のいく詩さえも作れないと思う。楽しむ漢詩作りはそれはそれで結構で、決して否定はしない、が、この事をよくご理解いただきたいと願っている。

ありがとう、石川忠久先生

神漢連前会長 岡崎満義

人を硬派軟派に分けてみるのがよくある。私はそれに「柔派」を加えている。ただし、「柔派」は少なく、私は3人を数えるのみである。その1人が石川忠久先生だ。1999年に文藝春秋をリタイアしてすぐ、頼まれて二松学舎大学の広報委員になった。知り合いの今西副学長に頼まれた。今西さんは「教授会を開いても先生方はあまり発言をしてくれない。あなたに出てもらって、大いに喋りまくってほしい」と言われた。喋り屋を期待されたのである。たしかに教授会にでてみると事務局の報告が終わっても、殆ど先生方からの発言はない。その教授会の司会が石川忠久学長であった。春風駘蕩の司会ぶりだった。日本の漢文漢詩をリードする第一人者だったが、その学識を外に向かって誇ることもない。こんなに威張ることから遠い人を見たことがない。石榴のように漢文漢詩が中にぎっしり詰まっているのに、と私はいつも思っていた。1999年に文藝春秋をリタイアしたあと、偶然に見つけた朝日カルチャーセンター横浜の窪寺啓漢詩実作教室に入門したのが2001年、その1年後に石川先生、窪寺先生とともに全日本漢詩連盟を旗揚げした。漢文漢詩の総本山・二松学舎大学の大地武雄先生が「入試試験には漢文を出さないでほしい。受験生が減って大学経営にさしさわりが

出てくると言われた」と嘆いていたので、そのまま放置すれば漢詩は絶滅危惧種になるなと思った。大急ぎで全日本漢詩連盟を作ったのだった。

石川先生は湯島聖堂にある斯文会の理事長でもあった。江戸時代から漢詩文の学問所として続く斯文会は、今も脈々とその伝統を守っている。いくつもの漢詩文の授業が行われている。細々とはあっても、それは続いていくだろう。その灯を消してはならない。

それにしても石川先生が亡くなられて淋しい。淋しいと言うよりも、日本の漢詩文の将来はどうなるのだろうか、という不安が大きい。漢詩文はそれを教える人の人柄、人格と深く結びついていような気がする。石川先生あつての日本の漢詩文、という気がする。

日本に留学していた金中さんによれば、中国でもいわゆる漢詩は、北京大学や清華大学の古典文学科に入って特別に習うものになってきているそうだ。日常的に家庭で楽しむものではなくなったとのこと。古い漢詩よりも自由詩の方が好まれていくそうだ。東洋の漢字圏の中で大切な地位を占めていた漢詩は、次第に先細りしていくのだろうか。日本の漢詩文の伝統の中で、石川先生が果たしてこられた役割は想像以上に大きなものだったに違いない。

私は石川先生のような漢詩文の大家に、公平無私の人格者に出会えたことを、本当に幸運だったと思っている。この先、こんな立派

な先生が現れるだろうか。石川先生、ありがとうございました。



講演に熱がこもる石川先生

真鶴にある故石川忠久先生の詩碑  
(全漢連が設立した詩碑だが真鶴に有るので、神漢連がその維持に協力していきたい)



「故石川忠久先生と神漢連」

神奈川漢詩連盟は二〇〇六年の創立以来、故石川先生には総会への参加・講演、吟行会への参加、会報、神漢連叢書等への賀詞などいろいろな局面でお世話になってきた。ここに頂いた玉詩の一部を年代順に並べて先生を偲び、あらためて御礼を申し上げる次第です。

一、平成二十年圓覺寺吟行会 二〇〇八年

小春閑坐塔頭中 小春閑坐す塔頭の中

時有微風翻落紅 時に微風有り落紅を翻す

案句喫茶喜僧話 句案じ茶喫し僧話を喜ぶ

塵心滌盡欲歸東 塵心滌き尽くして東に帰らんと欲す

二、平成二十二年総会・懇親会 二〇一二年

神奈川漢詩連盟有感

綠樹風清初夏時 綠樹風清初夏の時

相州今日有佳期 相州今日佳期有り

鷗盟集處說無盡 鷗盟集う処説尽きる無く

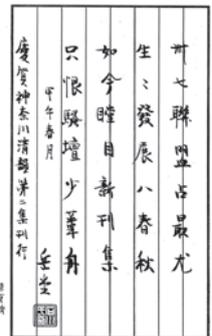
山水田園陶謝詩 山水田園陶謝の詩

三、神奈川清韻第一集 二〇一二年



巻頭の玉詩

四、神奈川清韻第二集 二〇一四年



巻頭の玉詩

五、七言絶句ここから一步 二〇一五年

「詠物詩選」を神漢連の知恵者が、早速このようなコンパクトな形に仕立て直して、「神漢連叢書」の第一冊として刊行というではないか。私は驚き且つ喜び、この快拳を満腔の賛意を以て迎えるものである。それにしてもこの表題は素晴らしい。多くの人には是非座右に具えてもらいたい。

六、漢詩神奈川十周年記念号 二〇一六年

新聞に広告を出して新人を募集し、これをクラスに編成して洒落た会名を付け、先輩が乗り込んで指導する、それを積み上げ、バトルと称して互いに競わせる、というシステムをこしらえたのは、特筆に値するものだ。金河新様式という所以である。

七、歩こう神奈川、漢詩八十景 二〇一六年

賀神奈川漢詩紀行刊行

鷗盟閱歳樹功全 鷗盟歳を閲し功を樹つること全し

新纂紀行名勝篇 新たに纂ず紀行名勝の篇

函嶺奇觀鎌府蹟 函嶺の奇觀鎌府の蹟

好詩悉在此中傳 好詩悉く此の中に在りて伝う

八、平成二十九年総会・懇親会 二〇一七年

欲冒荒天赴佳會 荒天を冒して佳会に赴かんと欲す

可驚神漢雅筵情 驚くべし神漢雅筵の情

先賢亡後後賢在 先賢亡じし後後賢在り

何事綿綿有不成 何事か綿々成らざる有らん

九、真鶴の詩碑建立(詩碑は六トシの小松石、自筆) 二〇一四年

眞鶴岸頭書懷 眞鶴の岸頭を懷し

背指靈峯向海濤 靈峰を背指して海濤に向えば

清波縹渺舞游禽 清波縹渺として游禽舞う

一條航跡青螺泛 一条の航跡青螺泛び

萬里雲間白日沈 万里の雲間白日沈む

曠士壯懷空眼界 曠士の壯懷眼界空し

騷人雅興滿胸襟 騷人の雅興胸襟に満つ

巖頭佇立馳遙思 巖頭佇立して遙思を馳すれば

何羨棲遲丘壑心 何ぞ羨まん棲遲丘壑の心

詩碑建立式典にて 二〇一四年



慶賀神漢連創立十年 二〇一六年  
辛苦經營閱十年 辛苦經營十年を閲し  
鷗盟共喜作新篇 鷗盟共に喜ぶ新篇を作すを  
請看金港晴嵐外 請う看よ金港晴嵐の外  
千載芙蓉自儼然 千載の芙蓉自から儼然

# 連盟の行事

## 詩を求めて出かける詩人たち

### ―高芝麻子先生講演会大盛況―

令和四年十一月二日(水)神奈川近代文学館に於いて、横浜国立大学准教授の高芝麻子先生による『詩を求めて出かける詩人たち』の講演会が、百二十名の熱心な聴講者のもと開催されました。

#### 【はじめに】

周の時代、中国王朝で作られた「詩経」。漢の時代に解説が書かれますが、その中に「毛詩大序」と呼ばれる非常に有名な文がございます。長いので一部分だけ紹介いたします。

#### 『詩経』毛詩大序(抜粋)

詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。情の中に動けば、言

に形る。之を言

て足らず。故に之

を嗟歎す。之を嗟

歎して足らず。故

に之を永歌す。之

を永歌して足ら

ず。手の之を舞ひ、



高芝麻子先生

足の之を踏むを知らざるなり。

感情が迸っていき自然と言葉になる、それが詩なのだ。と、今から二千年前の漢代の人と言っています。しかし、実際に詩人たちは感情が動き急に詩が出てきたわけではありませんでした。では、どんな時に自然を描く詩が作られるようになったのか、六朝時代の詩を紹介していこうと思います。

#### 【詩はどこからくるのか】

名門の家に生まれた晋の謝靈運は山歩きが大好きな人でした。「過始寧墅」は赴任先に行くときに始寧にある別荘に立ち寄った際の詩です。

東髮懷耿介 逐物遂推遷

違志似如昨 二紀及茲年

緇磷謝清曠 疲薶斬貞堅

拙疾相倚薄 還得靜者便

剖竹守滄海 枉帆過舊山

山行窮登頓 水涉盡洄沿

巖峭嶺稠疊 洲滎渚連綿

白雲抱幽石 綠篠媚清漣(この二句は有名)

葦宇臨迴江 築觀基曾巔

揮手告鄉曲 二載期歸旋

且爲樹枌檟 無令孤願言

屈折した思いを抱きながらそれを振り払うように山中を歩き回るのは、謝靈運にとつて癒しであり、救いだったのです。

六朝の時代の詩人は、辛くなったとき自然の中へ出かけていくと心が清らかになることを詩に描くことで、山遊びを楽しんでいました。

#### 【自然の中に分け入って】

盛唐の時代、王維の「田園樂七首」其の二です。唐代には少ないのですが六言絶句で田舎暮らしの楽しさを七首の連作にしています。

再見封侯萬戶 再び見えて侯万戸に封ぜられ

立談賜璧一雙 立ち談じて璧一雙を賜ふも

詎勝耦耕南畝 詎ぞ勝らん南畝に耦耕するに

何如高臥東窗 何ぞ如かん東窓に高臥するに

世の中で幸せと言われている生活、それは財宝をもらうよりものんびり自然の中で過ごすことだ。と詠っています。王維は安史の乱に巻き込まれて辛い目にあい、それ以降は政治にかかわらない生き方を選びたいと、自分を詠わず自然を描く詩が多くなりました。また、輞川の山あいにある広大な敷地の別荘で王維が二十首の詩を作り親友の裴迪にも同じタイトルで詩を作ってもらい「輞川集」という詩集を作りました。その中の一つ「鹿柴」の二人の詩を紹介いたします。

鹿柴

王維

空山不見人 但聞人語響  
返景入深林 復照青苔上

鹿柴 裴廌  
日夕見寒山 便爲獨往客  
不知深林事 但有麝麝跡

王維たちは辛さを消すためではなく、美しい自然を皆と共有したいという思いで詩を作りました。何かの目的で詩を作ることが自然に分け入る行為そのものなのです。そして、詩を作り詩集にまとめることは新しいことで、六朝時代にはまだ見られないところかと思われれます。

【大自然を楽しむに行く】

中唐の白居易も自然を愛した詩人でした。彼は、仏教によって心が救われてきたところがあるのですが、どうしても浄められないことがあるという詩「閑吟」をご紹介します。

自從苦學空門法 空門の法を苦学してより  
銷盡平生種種心 銷し尽くす平生種々の心  
唯有詩魔降未得 唯だ詩魔のみ降すこと未だ得ざる有り  
每逢風月一閑吟 毎に風月に逢へば一閑吟

素敵な空間を見たら詩を作ってしまうと言いつつ、今、楽しんで詩を作る自分も込みで、作っている詩のことを詩の中で言及するとう、自覚的に詩を作る行為をしています。今までの詩人は、詩そのものを言及したりはしませんでした。そこが一步進んで面白いなと思ひ、これが趣味として認定されてい

く一步なのだろうという気がいたします。

【詩のために自然の中に】

次は南宋、陸游の「小圃」です。南宋という時代は、国の半分を異民族に奪われており常に取り返そうとしながら自分たちが滅びないように頑張らないといけなく、バランス感覚が非常に問われる時代でしたが、国内は比較的安定した文化が育まれている時代でもありました。

剡曲西邊築草堂 小園聊復寄相羊  
魚行水際汀蘋動 麝過林中野草香  
覓句有時攜筆硯 遣懷隨事具杯觴  
少年朋舊凋零盡 不獨思人亦自傷

宋代になりますと、最初から詩を作るぞと自然の中に飛び込んでいき、私は詩を作ったよ、と自己言及の形がしっかりしています。描き方として、詩を作ることが詩の題材になっており非常に面白いと感じております。

【菊の詩】

結びは晩唐の司空図の「白菊雜書四首」其の二です。

四面雲屏一帶天 四面の雲屏 一帶の天  
是非斷得自儵然 是非断じて得て自ら儵然  
此生只是償詩債 此の生只だ是れ詩債を償ふのみ  
白菊開時最不眠 白菊開く時最も眠らず  
転句の「詩債」とは詩の借金、贈られた詩の

返事や詩の依頼の事で、中唐の頃からよく出てきます。司空図は「この人生は詩債の為にある。白菊が開くと眠れない。」と言っています。これは辛いのではなく、自然を見ながら詩を作ることが楽しくて仕方ないのです。趣味の中で生きることが自覚的にしたことがこの詩債という言葉に現れています。

詩債という概念は、締め切りに追われるけれども、それが詩を作るモチベーションを維持させるもの。そして、彼らが詩債に追われて詩を作ってくれたおかげで、私たちは今、漢詩を楽しむことができているわけなのです。

会場に来て下さった皆さんと、人類の重要なデータである古典の中に入り込み、古典の世界の人たちがどのように自然を楽しんできたかを一緒に追体験した二時間でした。YouTubeではこちらで紹介できなかった詩もたくさん紹介されております。是非ご覧ください。

(記 高橋純子)



熱心に聞き入る大勢の来場者

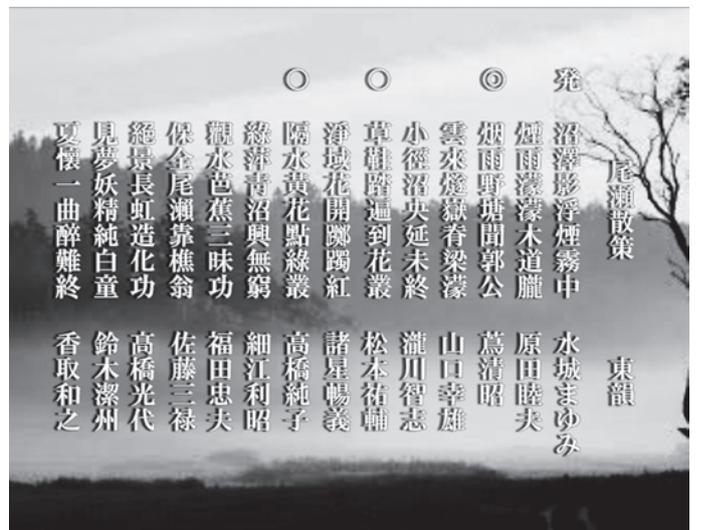
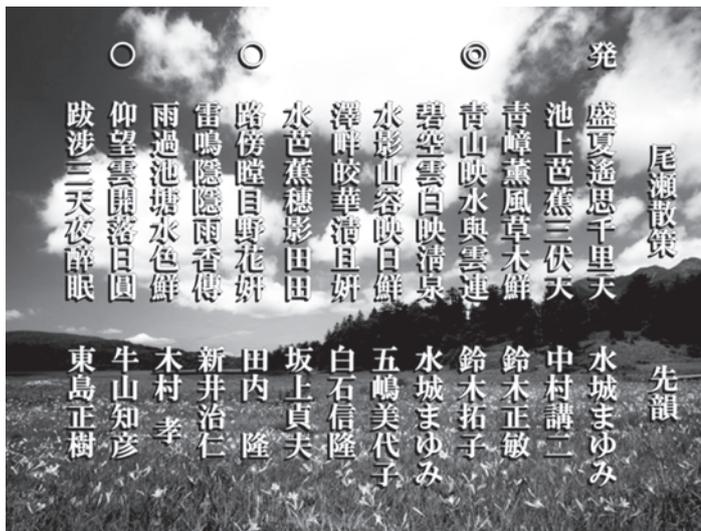
### 夏のオンライン吟行会

ー尾瀬に出かける(八月三十一日)ー

司会 十期会 薦 清昭

夏と言えば・・・散々悩んだ末、出かけたのは尾瀬でした。尾瀬といえは水芭蕉と詠じたいところですが、皆様与えられた韻字と格闘。尾瀬にもいろいろの連句となりました。

今回はご参加の方全員からコメントをいただきました。すんなり韻字を読み込まれたかた、苦戦なさったかた、途方に暮れた韻字から、かえって面白い句を捻り出したかた、尾瀬の歴史を読み込まれたかた、など様々。



コロナで出かけられないので代わりにオンラインで、の発想ではじまったオンライン吟行会。現地に行く、参加者と懇談する、食事もある、即興性を競う、等々本来の吟行会が持つ面白さは望むべくもありません。

今回はオンラインならではの特徴をどう活かすか?の原点に立ち返って議論してみました。ルールにのっとった七言一句を自宅でじっくり作り、先生のご指導を受ける。せっかく作るのなら、良い句を作ろうとの心です。始めて試みた無記名アンケートには出席者のほとんどのの方が回答してくださり、新方式はほぼ全ての方のご支持を得ました。裏方はほっとしているところです。

### オンライン吟行会に参加して

金星干支会 五嶋美代子

三月の千鳥ヶ淵オンライン吟行会までは、裏方として参加して参りましたが、八月三十一日は一般参加者として参加させていただきました。今回は更に改良された部分が各所に見られ、担当された皆様の熱意が伝わってまいりました。

その一つは、柏梁体ではなく、平仄を合わせた一句を作るようになったことです。初め、会が重苦しくなるのではないかと思いましたが、そんなことはありませんでした。考えてみれば漢詩を作り始めた時から平仄を合わせることは大前提なのですから、却って柏梁体の方がイレギュラーだったことに気がつきました。韻字を決めてから二日間の持ち時間があったことや、それぞれの句に対する講師の先生の講評がいただけたこと、参加者全員の声をお聞きすることができたことなど、会全体がよりきめ細かく丁寧運営されていて、大変快く感じました。

また、今回使用されたツールが、エクセルに変更になっていたりことや、投句が通常のメールで送信することになったのも大きな変更点でした。会がよりスマートにしかも内容の濃いものになったと感じました。今後の漢詩愛好家の交流の一形態として、一層楽しいものとなることでしょう。これからも参加させていただき下手な一句を投句してみたいと思っております。

神漢連ホームページ近況報告

ホームページ担当 五嶋美代子

最近の神漢連ホームページはこのような目次になっています。日々、最新情報をお届けできるように少しずつ形を変えています。

- ・トップページ：最も新鮮で重要な内容をひと言で紹介。「今月の漢詩鑑賞」を掲載
- ・入会のご案内と漢詩入門講座
- ・神漢連カレンダー：今後の漢詩サークルや鑑賞会、イベント等の予定を確認可能
- ・連盟の概要：会長挨拶、活動・組織・規約
- ・漢詩最新情報：講演会・全国大会等の情報
- ・漢詩サークル(漢詩創作)：日程・場所等
- ・漢詩鑑賞会：内容・日程・場所等
- ・神辞会：パソコンやモバイルツールを使った漢詩創作への試み
- ・神漢連YouTube：漢詩講演・漢詩鑑賞朗読・ツールの使い方・ZOOM関連等
- ・漢詩作品展示室：研修会やコンクルの優秀作品、オンライン吟行会作品等
- ・会報：過去の全会報
- ・リンク：神漢連およびその他の漢詩団体へのリンク
- ・アーカイブ：過去の記事を保存
- ・お問い合わせ：各種申込み、問い合わせ
- 是非、ホームページを皆様の漢詩研修にお役立てください。尚、ホームページにアクセスしたくない方は、グーグル等の検索ツールで「神奈川県漢詩連盟」と入力してサーチ下さい。

漢詩創作サポートツールの一般公開開始まる

神辞会世話役 蔦 清昭

これまで神漢連会員に限定して公開されていた菅原詩語集神辞会版、古典詩語集リンク集、絶句・律詩用推敲表が昨年九月から一般の方々に公開されています。

菅原詩語集神辞会版は神漢連のサイトに接続すれば使用できる電子詩語集。リンク集と推敲表はそのサイトからファイルをダウンロードして手元のパソコンで使うツールです。リンク集は定評ある古典詩語集「明治新撰詩語活法」「唐宋詩語玉屑」「明治新選詩語碎金」の目次集で、調べたい「部」をクリックすることで国会図書館のデジタル書籍を手元のパソコンで読むことができます。推敲表は五言・七言の絶句／律詩の推敲をサポートするツールです。平仄の確定(内蔵詩語集と照合して両韻字の平仄も確定します)、詩形を特定してその詩形の平仄ルールに合致しているかの判定、詩語の特徴、冒韻や和語の可能性のある語など参考情報の表示、字体変換などができます。ご興味のある方は、神漢連のホームページから「神漢連YouTube」に入り「七絶推敲表の使い方」をまずご覧ください。ダウンロードは同じくホームページから「神辞会」に入ることでも可能となります。菅原詩語集や古典詩語集リンク集もここにあります。会員各位には、これらツールの使い方をご説明する機会を増やしてゆく予定です。

第五回「漢詩作指導者養成研修会」参加報告

以文会 松井秀人

講師：後藤淳一先生  
 ・日程：令和四年八月二十七日・二十八日  
 ・及び九月三日、いずれもZOOM  
 初日：(一)漢詩作法の基礎について  
 (二)漢詩作チェック事項の解説

- 二日目：提出詩作に対し、討議と先生の批正  
 課題：庭上秋花、秋夜觀星の一首
  - 三日目：漢文訓読に用いる文語文法の講義  
 ・受講者：十一名、神漢連からは白石、松井
- 【講義内容】
- (一)漢詩作法の基礎
    - ①四声及び漢詩の詩型と句の構成
    - ②漢詩の押韻―平水韻と韻目
    - ③禁忌事項と特殊格律
    - ④絶句作法と律詩作法
    - ⑤漢文基本構文と訓読への文語文法
    - ⑥ネット上の漢詩データベース活用法
  - (二)漢詩作チェック事項
    - ①漢詩の基本規則
    - ②七言絶句の挟平格について
    - ③冒韻について
    - ④反法・粘法について
    - (三)用字・用語・文法上のチェック
    - (四)絶句全体の構成上のチェック
    - (五)漢詩作の添削に「搜韻」を活用
- 【感想】
- ①体系だった講義で有益であった。
  - ②改めて「搜韻」は必須の武器と認識。

漢詩鑑賞会A〜北宋時代から南宋へ

鑑賞会A世話役 鈴木正敏

鑑賞会Aは、六年間の唐詩鑑賞を修了後、二〇二〇年一月から「宋詩鑑賞」を開始。主任講師は、熱意溢れる桜庭先生と名ピンチヒッターの三村先生。講義も三年を経過して北宋詩も佳境。ZOOM方式で快調。適切且つ明解なる資料。また鑑賞会HPで、完全収録した講義録が、容易に視聴できて大好評だ。毎回、四〇名前後の会員が楽しんでいきます。

宋代は十世紀中期からで、凡そ三百年間の社会と文化の大きな変革の進歩した、東洋の大ルネサンス時代だった。

情熱的で華々しい唐詩に対し、宋詩の特長は理知的で精神の内に向かう論理性がある。梅堯臣、歐陽脩、司馬光、王安石と北宋の巨人蘇軾にドップリ埋没し鋭意まだ挑戦中。

名言に、「不識廬山真面目 只緣身在此山中」、蘇軾「題西林壁」七絶の転結。「廬山の真の姿を知らなかったのは、私が山中にいたからだ」と謳う。何事も距離をおいて客観的に見ないと、その真面目は把握できないと暗示。理を以つて詩を為す表現か。

十二世紀後半は第二の頂点、南宋の大家陸游、八五歳までに「劍南詩稿」に一万首残す。陸游・范成大・楊万里の三人は、北宋亡国の頃に一つ違いずつで生まれ、生涯の詩友だ。ますます面白くなります。ご期待ください。

漢詩鑑賞会C―原文を自分で読もう！

代表世話人 香取和之

鑑賞会Cは二〇一五年六月に故城田六郎先生を代表として始まり、清朝康熙帝勅撰の「佩文齋詠物詩選」から江戸漢詩人の館柳湾が抄出した七言絶句について、原文を韻目順に自分達で解読して鑑賞し、二〇二一年一月に完了しました。そして、その成果は「だれでもわかる七言絶句ここから一步」上下巻として刊行しました。

尚、館柳湾が抄出した詩は、「佩文齋詠物詩選」の凡そ四分の一であり、何故か有名な詩が含まれていないことが多々あります。その為、二〇二二年二月以降は元来の詠物類順に、「佩文齋詠物詩選」中の七言絶句（館柳湾抄出分は除く）を読み解き鑑賞することとし、継続中です。現在の講師は、中島龍一、新井治仁、香取和之の三名であり、月一回十二首を読み解いています。

本鑑賞会では、日月山河・四季などの自然から、建物・書画・楽器・寺仏などについての代表的詠物詩を原文から解読し鑑賞することが出来ます。また作詩面では、自分で何か詠物の詩を作る時のお手本となり、詠物類ごとに詩の構成、作詩の着眼点、詩語などが学べると思われれます。

漢詩は通常書き下し文・語釈・通釈付きで読んでいますが、自分で原文から読み解くのも面白いものです。是非多くの方々のご参加をお待ちしております。

「漢詩創作のための詩語集」は必携です！

詩游会 新井治仁

本書が発行され、すぐ使ってみました。既成の詩語集との大きな違いに驚くと共に、その面白さ、使い良さに感じ入りました。正に創作者の目線から、広い分野で、且つ必須な詩語が集められています。伝統的な詩語に加えて、現代の日常生活とその思いを漢詩に昇華させるのに必要な用語と固有名詞などが多角的に収録されています。中でも、全ての詩語に①平仄②読み③語意のほか、末尾の字に④韻目が加えられ一覽できるので、句作りの密度が格段と濃縮され、極めて実践的な体裁となつています。又、索引用に、韻目、五十音、双声、疊韻、重韻の五項目が備わっている点は本書を立体的に活用できる工夫であり、詩作ガイドとして白眉と言えましょう。

更に「作詩指南」として和習、異称、故事、詠題例を付録に載せ、座右に置いて繰り返し頼りにできる実用の手引書となっております。かねて「辞書は引くより読め」との言がありますが、本書は何度読み返しても面白い読み物としての効果もあると思います。漢詩界の新しい潮流である「搜韻」の活用が広まる中、アナログ系作詩者にも従来の詩語集の枠を超えた典拠として強力な道具になると感じました。「しっかりとした内容で、使い勝手の良い、真に作詩に役立つ詩語集を編むことが念願だった」との故石川忠久先生の序文を改めてかみしめている次第です。

# 会員のたより

## 私の好きな漢詩

### ー漢詩へのさまざまな思いー

「私の好きな漢詩」は、一昨年の神漢連十五周年記念行事の一環として行った「私の好きな漢詩アンケート」に回答された四十六名(各々二首選択)の方々に、順次その思いを語っていただくコーナーです。会報三十号から開始して、今迄に既に十名の方が自分の好きな詩への熱い思いを語っておられます。

今回採り上げている「江南の春」(杜牧)と「江雪」(柳宗元)は各々投票五位と七位で複数の方々投票していますが、「勸酒」(于武陵)、「偶題」(伝、朱熹)、「無題」(夏日漱石)は各々下記の会報執筆者だけが投票した詩です。神漢連の会員が如何に多種多様な詩に思いを寄せているかが判ります。

今回も各々の「好きな漢詩」の理由は、詩の中の心象風景への感動、自分の忘れ得ぬ思い出、貴重な人生訓、そして思いの尽きぬ詩情などと、皆それぞれ異なっております。決まり切った詩の解説書より一層詩への興味が湧いて来る、と感じるのは私だけではないと思います。(香取和之)

## 「江雪」に寄せて

詩遊会 新井治仁

江雪

柳宗元

千山鳥飛絶 千山鳥飛ぶこと絶え  
 萬徑人蹤滅 万径人蹤滅す  
 孤舟蓑笠翁 孤舟蓑笠の翁  
 獨釣寒江雪 独り釣る寒江の雪

僅か二十字の裡にこれほど簡潔で凝縮した

言葉で映像を鮮やかに創造した作品は、詩文を老後の慰みとする者にとって、少なからぬ衝撃と感動でした。句頭四文字の「千萬孤獨」はとても有名ですが、一語も難解な詩語を使わず荒寥たる山川、雪舟と釣り人で独自の心象世界を描き出しているのに心打たれました。

この五絶に触発されて「寒江独吟」詩や墨絵の題材として日本でも多くのフォロワーが続いたのも自然の成行であったのでしよう。歴史考証としては、若き官僚柳宗元等の政治改革の夢が順宗の失脚によって頓挫し流謫となった永州十年での作で、左遷の失意をこの漁夫に託したものとするのが定説のようです。ただそうした背景はあるにせよ、作者の見た風景とは浮世と無縁の超俗世界に生き、

終えていく人への清冽な憧れと渴望とを陶淵明の謂う「此中有真意」の心境で、描いたのがこの絶唱であったのではないのでしょうか。果たして舟の翁は何を釣ろうとしていたのか、実は糸を垂れそこにいるだけ願っていたのではないか、更に疑問は深まるのです。

## 「華髪何ぞ須いん酔郷に住むを」

十期会 蔦 清昭

無題(大正五年八月十四日夜)

夏日漱石

幽居正解酒中忙 幽居正に解す酒中の忙  
 華髪何ぞ須いん酔郷に住むを 華髪何ぞ須いん酔郷に住むを  
 座有詩僧閑拈句 座に詩僧有りて閑に句を拈り  
 門無俗客靜焚香 門に俗客無くして静かに香を焚く  
 花間宿鳥振朝露 花間の宿鳥朝露を振い  
 柳外歸牛帶夕陽 柳外の帰牛夕陽を帶ぶ  
 隨所隨縁清興足 所に隨い縁に隨いて清興足る  
 江村日月老來長 江村の日月老來長し

企業戦士として仕事を追いかけてまくって来たの次に来たのは酒中の忙。お気に入りのミュージシャンとお気に入りのライブバー、時々純粋にお酒を求めて、予定表にはまず夜の予定を入れる生活でした。一芸に打ち込む爽やかな人たちとお近づきになれました。

その頃出会った詩がこれでした。完全にリタイアしたら都心に住んで、飲んだ後帰りの心配をしないで済む生活を、と思ったこともあったけど、今はこの詩に近い毎日です。引越ししなくてよかったです。

漱石にとつては心を洗うための漢詩創作であったそうです。また漱石の漢詩は「思索の熟慮が簡潔な飛躍となって漢詩となる」と吉川幸次郎がいうところの「思索者の漢詩」でもあります。

朱子伝「偶成」に学ぶ

九詩期会 宇野次郎

偶成

伝 朱熹

少年易老學難成 少年老い易く学成り難し  
一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んずべからず  
未覺池塘春草夢 未だ覚めず池塘春草の夢  
階前梧葉已秋聲 階前の梧葉已に秋声

私は「鎌倉論語会館」で約十年間 論語を始めとした儒学の講義を聴講した。朱子(＝朱熹)は南宋時代にいわゆる四書(論語、大学、中庸、孟子)を一般の人々に広め、春秋時代の孔子の儒教を再興するのに大いに貢献があったといわれる。日本の江戸時代の初めの朱子学の流行にも影響を及ぼした。「大学」にも言われているように、修身齊家治國平天下、人の上に立つ者はまず自分自身の修養をやるべきだと、強調したことは教育の基本であった。学問は若いうちに学ぶべきであるという、この漢詩の趣旨はいつの時代になっても大切なことであり、若い世代に引き継いでいきたいものである。人は学ぶことにより無限に成長することが出来る。知識の習得も大切であるが、人として善悪の判断が出来るように、少年時代から人間学の基本を学ぶことは一層大切である。若い時代は厳しく育てられることにより、大人になってから道を誤らない人となる事が出来るのである。その意味でも、この漢詩の趣旨は永遠の教えである。

漢詩鑑賞のたのしみ

三水七歩会 高橋純子

勸酒

于武陵

勸君金屈卮 君に勧む金屈卮  
滿酌不須辭 滿酌辞するを須いず  
花發多風雨 花発けば風雨多し  
人生足別離 人生別離足る

「勸酒」を読んだ時、リズムが心地よく、漢詩を始めたばかりの私の胸にストンと落ちた最初の詩だった。親しい友との別れを惜しみ、せめてこの時間を酒と共に楽しまんとする切ない情景が浮かんできた。今回久しぶりに、声に出して読んでみた。以前と全く違う印象だった。花が散る、人との別れ、何事も永くは続かない。だから今を大切に：と、無常観のようなものを感じた。また別の日に読んでみる。すると今度は、貴重な金の杯になみなみと酒を注ぎ、友人を励ます作者の姿が見えてくる。頑張れよ。人生は色々あるが、次の年にはまた花が咲き、新しい出会いもあるさ、と。何故印象が変わったのか。私が年を重ねたことも一因だろうが、自分でも気づかないその時々の内面の感情に引き合わせて漢詩を読んでいるのかもしれない。再び読んだことで、異なった視点から鑑賞しうる喜びを知った。また何年後かに読んだ時どんな思いを抱くだろう。そしてその度、この詩がますます好きになりそうだ。

漢詩を描く

金星干支会 安藤啓子

江南春

杜牧

千里鶯啼綠映紅 千里鶯啼いて緑紅に映す  
水村山郭酒旗風 水村山郭酒旗の風  
南朝四百八十寺 南朝四百八十寺  
多少樓臺煙雨中 多少の楼台煙雨の中

私の通う水墨画教室では、毎年何回か作品展が開催され日頃の成果を確認したり新たな目標などを探り楽しんでいきます。通常の稽古では、水墨画の基本的な手法などを繰り返し学びその後、各自の課題に取り組みます。先ずは、熟考して取り組んでみたいテーマやあたたためているモチーフを下図にして指導助言を求めます。過般、「春景色」に挑戦した時、「これは、かの名詩ですね。」と下図を開くと師の一言、余りにもベタだとの指摘があり、手直しを繰り返して「江南春」から春の情景描写を試みたのです。そして出品作品にようやくと仕上げました。この「江南春」は、詩吟の稽古の初心の頃に何度も節調を耳で覚えて、吟じてみると同時にそこでは漢詩に関する諸々の指導も得て楽しく仲間も広がりました。機会あるごとに吟じるのは「江南春」です。「杜牧」を知り「平仄」「南朝」などを学ぶ事もできました。日ごろ「せんり〜」と口ずさんでいることがままあります。

会員の声

―多彩な会員の漢詩との出会い―

千代田岳精会漢詩研究部の紹介

千代田岳精会 田川行雄

岳精流日本吟院の下部組織である千代田岳精会は、岳精会より数年遅れて神奈川漢詩連盟に加盟させていただきました。詩吟で吟じる漢詩をより深く理解して、詩吟の世界を更に追及したいとの思いで参加された会員が多かったかとおもいます。

平成二十八年二月から、神奈川漢詩連盟から多くの先生に来て戴いて、初心者入門講座を開いて戴き、六回にわたって、熱心にご指導戴きました。八月七日付けの三十人の最終詩稿が残って居ります。

同年十月から、桜庭先生、香取先生に熱心にご指導を戴き、現在まで、楽しく漢詩を学んでおります。その間、今までの会場が閉鎖になったり、多くの会員が体調不良や諸般の事情で漢詩の継続を断念されるなど大きな変化があり、只今では九名の会員となりましたが、新宿文化センターを新しい拠点として、偶数月に開催しております。素晴らしい漢詩の生まれた背景や作者の気持を理解することにより、より味わいの深い吟詠が出来ることを目指して、頑張っていく処存です。

今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

電子辞書の効用

志詩会 木村 孝

定年退職後、日本語ボランティアをしていたので、英語や中国語、もちろん国語辞典も必要なのだが、たくさん辞書を持ち歩くわけにもいかないので電子辞書が必携だった。

二〇一九年の漢詩初心者講座に参加する際「要、漢和辞典。電子辞書可」とあったので自分の電子辞書を調べてみた。これまで使ったこともない大修館漢語林の電子版が入っており平仄の表示もあるのでこれで済ますことにした。以来、紙の辞書を買うこともなくもっぱらこの電子辞書を愛用している。比べたことはないが、漢字や熟語を調べる速さは紙の辞書より数倍速い。漢詩一字一字の平仄を調べるのもまったく苦にならない。漢詩では見たこともないような漢字に出くわすが、そんな時紙の辞書では画数を数えたり部首を調べたりが必要になる。この点電子辞書なら書き一発だ。

漢詩サークルの例会では先生もメンバーも厚い辞書を持つてこられる。私は少々後ろめたい気がしながら電子辞書を使っている。何より持ち運びが便利。漢詩づくりでは漢和辞典以外にも国語辞典や百科事典、時には中国語辞典も必要になるが、これらがこの一台に入っているのはありがたい。詩作に熱中して使用頻度が高くなるとすぐに電池が切れてしまうというデメリットがあるものの、電子辞書の利便さには代えられない。

中国で盛り上がる古詩学習熱

逸語会 松田奈月

中国に暮らして二十年余り。普段の生活やドラマのセリフで、古詩のちよつとしたフレーズが使われることが多く、国民的な詩の素養の高さを感じる。それもそのはず、中国の義務教育(小学校と中学校)で、暗記する古詩の目標は240首にものぼる。小学一年生でスラスラと杜甫や李白を誦んでいるのだ。

伝統的な科挙の国では、いまだ受験戦争は日本では想像できないほど厳しく、大学に進学するのは狭き門。詰込み型教育ともいわれるが、幼い時に暗記したものは一生の財産として残るだろう。

ここ数年、国営放送のCCTVで『中国詩詞大会』という番組が放送され、人気だ。いわゆる「漢詩」の知識と理解を競うクイズバラエティで、出題問題には詩経や、唐代や宋代の詩に混じり、毛沢東の詩が出てくることも。回答者には老若男女、幅広い層が登場し、その知識の豊富さには舌を巻く。このような番組が大々的に制作されるのは、近代に失われた自国の文化を補強しようとする現代中国の愛国教育も影響しているようだ。

それにしても、「漢詩」がブームともいえる中国で、自分で詩を作ろうという動きは多くない。これだけ古詩の素養があれば作詩も幅が広がるのにと羨ましく、こちらは発音のピンインが振られた小学生用の漢詩テキストで学ぶ日々である。

恩師と陶潜翁との邂逅

副会長 飯島敏雄



高校の古文・漢文の鏡淵先生は他の授業よりも内容に深みがあり、また先生の風貌も先生というよりも髪も長く學者のようであった。授業

に面白さを感じた私は片道二時間の電車の中で、行きは予習、帰りは復習にしていたので質問することが多いため、鏡淵先生が私に目をかけてくださるようになり、自宅にも招いて授業では聞けなかつた陶潜翁の「歸去來辭」や「五柳先生傳」を特別講義して下さった。鏡淵先生と漢詩と漢文との出会いはその後、五年間の大学院時代に同僚と違って一人恩師と研究の進め方で衝突した時に、「意に反して同意できないことには従えない」と思った時に、鏡淵先生から聞いた陶潜翁が歸去來辭を書くきっかけを述べた「われ豈(あに)五斗米(県令の俸給)のために腰を折りて郷里の小人に向かわんや」と県令の職を投げうったということを思い浮かべて、一人旅行をし、山梨の湯治場にこもったこともありました。また下宿の周りに楊を植えて「五柳庵」と名付けて、部屋に五柳先生傳を書きにして額に飾っていたりしました。今もこの気持ちは変わらず、別の趣味の囲碁の中で「杜甫、白居易、蘇軾などのように碁の詩を作ること」など桃源郷に入る道を探している毎日です。

私の「周遊漢詩抄」について

興公 國田公義

認知症予防を目標に七十歳から始めた漢詩も三百首をこえました。三年前から詩集作りを準備していましたが、数え九十七歳になり、何とか昨年五月の神漢連の会までに発行を決心しました。

巻頭に窪寺先生の玉詩をおき、書画や吟を含め、新しいタイプの明るく美しい、読み易い物を創ろうと工夫しました。吟譜は五線譜にして、子供や一般の人にも解り易くした。

昨年五月二十日の大会で約百冊配り、渡せなかつた役員や旧友・親戚・同窓会員等へも送った。反応は絵を見ながら、読み易かつたとの事。

同郷の玉井幸久様からはお礼にと裁錦會詩集を頂き感謝申し上げます。村内必典様からは「素晴らしい詩集ありがとう、だが誤りもあるよ」と。「七言絶句の承句と結句では第二・三字が仄字の場合是不整である」と。唐詩選での出現率までつけて、御教示を戴き、推敲中です。

皆様からはお礼にと、詩集や語録と御感想等をいただき心から感謝申し上げます。初心者の方の御参考になればと思っております。



「既望会」(十六期の会)発足

既望会代表 内山早奈江

令和四年度の初心者教室を受講したメンバーにより昨年十月十一日に無事十六期サークルの初回会合が開催できました。十六期サークルのサークル名は「既望会」十六夜の月の意味になります。美しい名前です、しかも十月十一日はちょうど十六夜にあたり不思議な気持ちになりました。

メンバーの年代も幅広くそれぞれの方が漢詩に興味を持った理由はいろいろですが、漢詩連盟やサークル活動を通して漢詩に対する理解が深まり、充実した活動になれば良いと思います。

初心者教室の参加で講師の先生方、運営して頂いている漢詩連盟の会員の方のご苦勞には頭が下がりました。私は今まで特に文化的活動のリーダーになつた事もなく集団での行動も苦手ですが、少しでもお手伝いできればと思ひまして十六期サークルの代表をさせて頂いていただきたいと思ひました。メンバーの皆様や漢詩連盟の先輩方には今後ご迷惑をおかけすると思ひますが、皆様と漢詩の世界を楽しんでいけたらと思ひます。



既望会の会員と講師

# 漢詩と私

高津有二

◆会社定年後は生来の地声の大きさを活かして詩吟に挑戦しようと考えていた。詩吟の歌詞は八割が漢詩である。そんなある日、通勤途上の小田急線電車の吊り広告で「楽しく漢詩を作ろう」が目にとまった。早速、国士館大学の鷺野正明先生の「社会人講座」に申し込んだのが漢詩との出会いの最初である。

◆二〇〇九年、横浜開港一五〇周年記念漢詩大会の募集があり、神奈川県漢詩連盟の田原事務局長に電話すると、初心者入門講座を勧められて受講した。

その時の仲間の皆さんが、好文会(神漢連第三期生)で、爾来、十四年間、コロナ禍でも一度も休むことなく例会が続いている。

何人かの方が他界され、一昨年、長年ご指導を頂いた、城田六郎先生が急逝されたのは正に痛恨の極みである。開港記念漢詩大会の応募作品は次の通りである。

横濱開港百五十年 横濱開港百五十年  
外夷警醒太平眠 外夷警醒す太平の眠り  
開港如何轉躁然 開港如何転た躁然たり  
歲月滔滔桑海感 歲月滔滔桑海の感  
諸賢偉業世相傳 諸賢の偉業 世に相伝えん

◆その後、全日本漢詩連盟に入会した。二〇一四年、全日本漢詩連盟宮城大会で、東日本大震災の「一本松」を詠じ、河北新報社賞を受賞した。宮城大会の翌日、陸前高田市の復興のシンボルである奇跡の一本松を見上げた時の感激は今でも忘れられない。

一本松

一本松

瑤林瓊樹絶無蹤 瑤林瓊樹絶えて蹤なし  
蒼海沙汀昔日容 蒼海沙汀昔日の容  
晚浦漁舟維纜處 晚浦漁舟纜を維ぐ処  
長投夕影凜孤松 長く夕影を投じて孤松凜たり

◆漢詩と話題が外れるが、我が人生の誇りとして自負していることは「五街道の踏破」である。これは鎌倉にある大学の同窓会仲間、約五十人余りと東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道の旧五街道の一四〇〇キロの道程を九年八か月をかけて、徒歩で踏破した事である。既に何人かの方が鬼籍に入られており、ご冥福を祈ると共にその時の拙詩を披露したい。

踏破五街道

五街道を踏破す

舊朋相伴發東都 旧朋相伴い東都を発し  
萬里客遊挑壯圖 万里客遊 壯図に挑む  
歩歩十年行路險 歩々十年行路険なれど  
追懷一夢苦中愉 追懷一夢苦中の愉しみ

◆昨年、満八〇歳の杖朝の歳を迎え、その時の感慨を詠んだのが次の詩である。母は四〇歳で私を産んでくれ、当時としては、珍しく一〇〇歳まで生きて、没後、二〇年となる。明治生まれの父は厳格で、よく叱られたが、母に叱責されたことは数度しかなく、八〇歳の今になっても、その時の情景を忘れることが出来ない。

杖朝懷萱堂

杖朝萱堂を懐う

哀歡苦樂我人生 哀歡苦樂我が人生  
自壽杖朝樽酒傾 自ら杖朝を壽ぎ樽酒傾く  
先妣登仙二句歲 先妣登仙し二句歲  
杯中猶有論吾聲 杯中猶お有り吾を論すの聲

◆会社定年後にあれこれ挑戦してきたが、体力の問題、その他の事情で挑戦は一段落しており、残ったのは漢詩だけになっている。漢詩はライフワークとして続けていきたい。漢詩の鑑賞・作詩は、佩文韻府、圓機活法、大漢和辞典の時代からパソコン・スマホの時代に移ろうとしている。勉強のツールは変わっても漢詩の神髄は変わらないので、菲才を顧みず、橋渡し役が出来ればと願っている。

◆神奈川県漢詩連盟のモットーは「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」であるが、「遊ぶ」の境地を極めるのも、これまたなかなか難しい。自分なりに「漢詩を学び、漢詩を楽しむ」に読み替えて、これからも漢詩とともに歩いていきたいと思う今日この頃である。

「令和四年度  
全国漢詩大会」で  
神漢連会員活躍

第七回漱石記念漢詩大会

佳作

客中送春

客中春を送る

高橋純子

夜來風雨洗芳菲  
江上花流春自歸  
殘露濕衣津渡曉  
新鵲掠月一聲飛

夜來の風雨 芳菲を洗い  
江上の花は流れて春自ら帰る  
残露衣を湿す 津渡の暁  
新鵲月を掠めて一声飛ぶ

旅館寒燈

旅館の寒灯

小嶋明紀子

客中除夕與誰親  
半夜窓前獨愴神  
欲作家書多暗淚  
孤燈空照望鄉人

客中除夕誰とか親しまん  
半夜窓前独り神を愴ましむ  
家書を作らんと欲して暗涙多し  
孤灯空しく照らす郷を望むの人

入選

立秋即事

立秋即事

宇野次郎

空庭氣爽雨初収  
籬畔蟲鳴夜色幽  
獨坐小齋燈火下  
讀書三昧散人秋

空庭氣爽やかに雨初めて収まる  
籬畔に虫鳴き夜色幽なり  
独り坐す小齋灯火の下  
読書三昧散人の秋

湖上望嶽

湖上望岳

牛山知彦

客中又訪舊山莊  
窗近清湖六月涼  
仰首靈峰在天上  
雄姿倒影水中央

客中又旧山莊を訪れば  
窓は清湖に近く六月涼し  
首を上げば靈峰天上に在り  
雄姿影を倒にして水中央

亡友挽歌

亡き友への挽歌

松田奈月

青山獨步悼君行  
一片白雲天更清  
墳樹綠陰埋骨處  
香風蝶舞百花明

青山独り歩いて君を悼みて行けば  
一片の白雲天更に清し  
墳樹の緑陰骨を埋むる処  
香風に蝶舞いて百花明らかなり

秋日閑遊

秋日閑遊

横溝喜久男

扶筇來賽寺門頭  
映發靈葩赤蒜稠  
風冷夕曛如惜刻  
秋蛸切切誘閑愁

筇に扶り來賽寺門の頭  
映発の靈葩赤蒜稠し  
風冷やかに夕曛刻を惜しむ如く  
秋蛸切切閑愁に誘う

第十四回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞・三条市長賞

高橋純子

晚秋郊行

晚秋郊行

深秋小徑曉寒生  
風拂幽叢香氣清  
誰折一枝供古墓  
傲霜白菊映苔明

深秋の小徑 曉寒生ず  
風は幽叢を払いて香氣清し  
誰か一枝を折りて古墓に供せる  
霜に傲る白菊苔に映して明らかなり

「作者の一言」

買物に行く道沿いに小さな地藏堂があります。立ち止まったことはないのですが、いつも心の中で手を合わせて通ります。そこにはいつでも季節の花が供えられており、優しい気持ちになります。

今ではマンシヨンの立ち並ぶこの道は、青梅街道から分かれ堀之内妙法寺へと通ずる道で、江戸時代には参詣の人で賑わっていたそうです。そこで、時代をさかのぼり当時の人も目にしたのであろう風景を想像してみました。

優秀賞

小嶋明紀子

登樓對雪  
閒憑危檻眺天涯  
膝六忽來風雪斜  
晚霽冰輪初照處  
一城鴛瓦著銀花

樓に登りて雪に対す  
閑に危檻に憑りて天涯を眺む  
膝六忽ち来りて風雪斜めなり  
晚霽氷輪初めて照らす処  
一城の鴛瓦銀花を着く



秀作

新秋夜坐

雨洗殘炎天地清  
芸窗風爽動吟情  
熒然燈火披書卷  
促織啾啾籬落鳴

深秋夜坐

雨殘炎を洗ひて天地清し  
芸窓風爽やかにして吟情を動かす  
熒然たる灯火書卷を披く  
促織啾啾籬落に鳴く

宇野次郎

古寺黄昏

苔蹊策杖到禪門  
老衲未歸寒鳥喧  
佇立堂前幽寂處  
風翻貝葉欲黄昏

古寺黄昏

苔蹊杖を策きて禪門に到る  
老衲未だ帰らず寒鳥喧し  
佇立す堂前幽寂の処  
風は貝葉を翻して黄昏ならんと欲す

小嶋明紀子

思母

兩間茅屋在山阿  
去國徒驚三載過  
聞說家慈衰老甚  
向寒眠食近如何

母を思ふ

兩間の茅屋山阿に在り  
國を去りて徒に驚く三載過ぐるに  
聞説く家慈衰老甚だしと  
向寒眠食近ごろ如何

杉森千枝美

佳作

寒村茅屋兩三間  
無客無書盡日閑  
京國披圖頻想像  
膏車何日出鄉關

暇日

寒村の茅屋兩三間  
客無く書無く尽日閑なり  
京國圖を披きて頻りに想像す  
膏車何れの日にか郷關を出でん

杉森千枝美

日中友好の部

佳作

秋夜西安宴

寂寂鐘樓還舊觀  
亭亭明月發新光  
如今中日交流宴  
詩客醉吟歡笑長

秋夜西安の宴

寂寂たる鐘樓旧觀に還り  
亭亭たる明月新光を発す  
如今中日交流の宴  
詩客醉吟して歡笑長し

牛山知彦

榮西禪師

入宋看經一衲衣  
傳來茗飲與禪機  
猶存京洛建仁寺  
千載依師映暉

榮西禪師

宋に入りて看經す一衲衣  
伝え來たる茗飲と禪機とを  
猶ほ存す京洛の建仁寺を  
千載師に依りて暉に映す

小嶋明紀子

祝日中國交回復五十年

中朝文物古來傳  
學術相追今昔賢  
回復修交過半百  
雙邦友誼久彌堅

日中國交回復五十年を祝す

中朝の文物古來伝はる  
學術相い追ふ今昔の賢を  
修交を回復して半百を過ぐ  
双邦の友誼久しく弥よ堅からん

杉森千枝美

訃報

■神奈川県漢詩連盟の会員 山本孝司氏は  
令和四年七月十九日に逝去されました。  
(享年八十五)

ここに謹んで哀悼の意を表し、  
ご冥福をお祈り申し上げます。

令和五年の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう!

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページからも入手できます。

令和四年度全日本漢詩連盟設立二十周年記念大会

記念大会

令和五年三月十八日 二松學舎大学  
応募完了

第38回国民文化祭―いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

令和五年十月二十八日(土)  
自由題

第26回全国ふるさと漢詩コンテスト

(多久市主催)

第八回漱石記念漢詩大会

詩題と応募期間は三月頃決定予定  
近年は大会の開催なし(熊本市)  
自由題(例年)

第十五回諸橋轍次博士記念漢詩大会

応募期間 四月一日〜六月三十日(例年)  
三条市  
大会日程は三月頃決定予定  
自由題(例年)

応募締切 七月三十一日(例年)

# 神奈川県漢詩連盟 令和五年の行事予定

## カレンダーに予定を記入しましょう

### ●漢詩入門講座

漢詩の鑑賞と実作(全五回の講義と実習、第十七期生)  
漢詩に関心のあるお友達に声をかけ、推薦して下さい。

- 期 日 ①四月十三日(木) ②四月十九日(水) ③四月二十六日(水)  
④五月十一日(木) ⑤五月二十四日(水)

時 間 午後一時三〇分～四時

講 師 三村公二会長他 連盟役員

場 所 神奈川近代文学館

問合せ・受講申込(連盟事務局)

〒221-0001 横浜市神奈川区西寺尾一―六―四

新井治仁 TEL/FAX 045-432-5438 Mail: haruhitoarai@hotmail.co.jp

### ●総会・講演会・懇親会

期 日 五月三十日(火)

時 間 午後一時～四時三〇分(総会・講演会) / 五時～六時三〇分(懇親会)

場 所 神奈川近代文学館(総会・講演会) / KKRポートヒル横浜(懇親会)

総会議題 令和四年度事業報告、令和五年度活動計画、他

講演会 市川桃子先生 演題未定。尚、講演会は会員以外も聴講可。

参加申込 総会・講演会は申込不要。懇親会出席の方は、四月初旬発送予定の開催案内に同封の振込用紙で振込み願います。

### ●吟行会

オンライン吟行会を二月二十七日(月)に開催予定。開催日が近づいた頃に、メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

## 編集後記

前号より編集委員に加わりましたが、今回も殆ど編集作業をしないうちに、香取和之さんが企画、寄稿者とのやりとり、全体のとり纏めを、高橋純子さんが細部のチェックと難しい講演のまとめをやっていただき、私はほんびりこの後記を書いている次第です。次回はもう少し働かなくてはと思っています。

石川忠久先生追悼については、三村会長の挨拶文、岡崎前会長の寄稿、先生の神漢連に寄せられた玉詩を掲載しました。警戒に接したことのない者が言うのも何ですが、漢詩が他の文芸各分野と違って分派することもなく、纏まって活動をできているのは先生のおかげだと改めて思い知らされます。

高芝先生の講演概要は、四・五頁に掲載のとおりですが、YouTubeでは、ビジュアル編集が難しいところを担当の方のお骨折りで、全容が大変見易くなっていますので、ご覧下さい。

今号でも、沢山の方に「会員のたより」「会員の声」「漢詩と私」に投稿していただきました。漢詩や人生にそれぞれの思いがおりですが、ご縁があり、こうして神漢連に集っているのだと感じました。

会の活動を大きく制約してきたコロナ禍ですが、ウィズコロナで恐る恐るではあるものの、活動再開を含めて共生する時代となりそうです。

(東島正樹)